

“違い”を認め合う 社会をめざして

NPO法人 クリエイティブサポートレッツ 理事長
障害福祉サービス事業所 アルス・ノヴァ 施設長

久保田 翠 Kubota Midori

KORYU Interview



浜松市の郊外で障がい者の自立訓練や生活訓練を行う障害福祉施設の「アルス・ノヴァ」。施設長であり、母体のNPO法人クリエイティブサポートレッツ理事長も務める久保田さんは「障がい者と健常者が違いを認め合う社会の実現」をめざして活動を続けている。その揺るぎない原動力は何なのか。久保田さんのこれまでや障がいと社会に対する思いを伺った。

障がいを持つ息子が生まれ、
自分達の居場所を探す日々

訪れたのは「障害福祉サービス事業所 アルス・ノヴァ」。扉を開けた瞬間、「どうもー」と握手を求めて駆け寄る元気な利用者の声。周囲に目をやれば、音楽に合わせて踊ったり好きな絵を描いたり、のんびり昼寝をしたりと、ひとりひとりが自分の時間を楽しんでいるようだ。

浜松市で障がいの者の自立訓練、生活介護、就労移行、放課後の児童

デイサービスを行う同施設。施設長の久保田翠さんは美大を卒業後、約15年前まで建築設計の仕事で精力的に行っていた。

「長女を生んだ時は1年で仕事に復帰できました。しかし2人目の壮は重度の障がいがありました」
仕事復帰のために保育園を探しましたが、壮くんを預かってもらえる施設は見つからない。仕方なく仕事をあきらめ、子育てに奮闘する日々。

その中で久保田さんは壮くんが音楽に大きな興味を示すことを発見する。

「私たちの居場所がほしい」と
強く思いました。

「音楽に合わせて手を動かす姿を見て、人は知的能力に差はあっても感性は誰にでもあるんだと実感しました」
ならばその感性を伸ばそうと音楽教室へ通わせたものの、やはり健常者の子どもたちと一緒に音楽を楽しむことは難しかったと振り返る。

「仕事から離れ、近所に知り合いもいない状況に深い孤立感を味わいました。どこかに私たちの居場所がほしいと強く思ったのです」

アートと障がいを結びつけた
「エイブル・アート」と出会う

その後、壮くんは障がいの療育施設へ入園。それを機に、久保田さん

は市役所へ仕事復帰の相談へと駆け込んだ。しかし壮くんが施設にいるのは一日のうちでも限られた時間だ。条件に合う働き口はなかなか見つからず、育児と仕事を両立させる難しさに愕然としたという。また、仲間のお母さんの話を聞くうちに、障がいのある子どもを持つ母親は社会参加をすることがかなり難しいという現実も浮かび上がる。

「それならば、子どもたちがそのまま受け入れられ、家族も幸せになれる場所を作ろう」と7人の母親仲間とともに活動を開始。任意団体を立ち上げ、200人ももの同じ境遇の母親が会員となった。

だが福祉のことを全く知らない

クリエイティブサポートレッツのオープン当初に開催されたサマーイベントの様子。「日ごろできないことを思いっきりやろう!」をコンセプトに行われた。

久保田 翠 くぼたみどり

静岡県出身、静岡県浜松市在住。1988年東京芸術大学大学院環境造形デザイン科修了後、妹とともに「環境・空間・デザインAMZ」を設立。93年より高木滋生建設設計事務所にて環境デザインを担当し、94年同事務所浜松事務所代表に就任。99年より年静岡大学農学部非常勤講師を務め、壮くんが生まれたことをきっかけに2000年「クリエイティブサポートレッツ」を設立、04年NPO法人化。08年「たけし文化センター」事業をはじめ、10年「障害福祉サービス事業所 アルス・ノヴァ」を設立、現在に至る。

2008年に開設された「たけし文化センター」。



自分にいったい何ができるのかと悩む日々が続いたという。そんな時、久保田さんは障がいとアートが一緒になって幸せを実現していく「エイブルアート」に出会う。

「アートは人を認めるツール。障がい者は専門の教育を受けていませんが立派なアーティストであるということ、いいものはいいと認めていこう。そのような考えに共感し、この活動なら私にもできると思いました」

こうして2000年にボランティア団体として「クリエイティブサポートレッツ」を設立。アートを中心に、障がい者・健常者がともに参加できる多様な講座やイベントを行うことで、障がいの壁を乗り越え、さまざまな人が交わることでできる事業に取り組んできた。

「やりたいこと」が創造の柱 たけし文化センターの活動

「クリエイティブサポートレッツ」を04年にNPO法人化。08年には「違いを認め合う社会の実現」を具現化した事業体として「たけし文化センター」を設立した。この起草の源となったのは壮くんだ。

入れて叩いています。12年間通った学校の先生は、壮を社会に送り出すために、その行為を別の生産的な行動に変えようと必死に指導してくれました。でも結局できなかった。その時私は、できないことをできるようにするよりも、逆に365日ずっと容器を叩き続けるその情熱をすごいと感じてもらいたいと思ったのです」

その話を聞いた仲間が「彼のやる気を讃えるセンターを造ろう」と発案。こうして個人の「やりたいこと」を文化創造の柱にする「たけし文化センター」が誕生したのだ。ここではさまざまな違いを越えて自分のやりたいことをやる場として、障がい者だけではなく、健常者向けのイベントや講座も多く行われる。

「たけし文化センターができたことで、これまで福祉とアートを一緒にすることに違和感を感じていた人にも、レッツの活動をようやく少しは理解してもらえようになりました」

**個人に合った「仕事」を見つけ
社会とつなげる施設を設立**

しかしどんなにアートイベントが盛んになっても、やはり「障がい者が社会と混ざり合って生きるにはどう



テープを重ね貼りされた人形。利用者が叩きながら音聞き、貼り具合を調整、納得できたところでできあがり。彼らのこだわりが見られる。



利用者たちが作った作品を見ながら、それぞれの個性に合うプログラムを作成するスタッフ。



オリジナルイベントの一例。ラジオ体操の音楽に合わせて利用者たちが思い思いの「体操」を披露する「ラジオ体操」。

NPO法人 クリエイティブサポートレッツ

「障がいや国境、性差、年齢などあらゆる“違い”を乗り越えて全ての人が互いに理解し分かち合い共生できる寛容性のある社会づくりを行う」を理念に2000年に設立(04年NPO法人化)。障害福祉事業や文化センター事業を運営、イベント企画やコミュニケーションを核とした地域づくりなどを行っている。<http://cslets.net/>

障害福祉サービス事業所 アルス・ノヴァ

障がいのある人がその人らしく生きていける生活環境づくりを行う施設。生活介護や自律訓練、就労移行訓練、放課後デイサービス以外にも、日中一時支援などさまざまな形で障がい者支援を行っている。

たけし文化センター

個人の熱意から始まる活動が、他者とつながり発展することを軸とした公共文化施設プロジェクト。その一環として、2014年秋に「のづか公民館」をオープン予定。障がい者や健常者向けのイベントなどを行うほか、さまざまな人々の交流拠点を目指している。

※エイブルアート=エイブル・アート・ジャパンが提唱するアートと人間の可能性を再発見する運動。
アートを通して、障がいを持つ人など生きにくさを抱える人たちが豊かに暮らせる社会をめざす。

したらいいか、健常者の人々に一緒に考えてもらう」という根幹の思いを遂げるのは難しいと感じた久保田さん。そこで彼女は、障がい者の社会的地位向上をめざすために2010年、「障害福祉サービス事業所アルス・ノヴァ」を立ち上げた。ここは通常の福祉施設と違い、決まった作業を行うのではなく、利用者それぞれが好きなことやできることをスタッフが見つけ、個々の仕事を作っていく。

「利用者の親御さんには、ここでいう作業は何かと聞かれますが、「彼らは存在するだけで仕事をしていませ」と私はいつも答えています」

例えば、1日中ほぼ寝ている利用者が、たまにゆっくりと階段を昇り降りすることがある。普通なら1分もかからないところを約20分も時間をかけて。

「急かしてしまうところですが、周囲を眺め、微笑みながら階段を昇降する彼の姿を見ていると、私たちの想像を超えた豊かな時間が流れていることが感じられるのです」

そんな彼とともに散歩を楽しむワークショップを開催したところ、参加者からは「こんなにゆっくり景色を楽しんだのは初めて」「いい時間が過ぎた」という声が寄せられた。

「普段の生活ではなかなか経験できない時間も彼といるから過ごせる。それが彼の立派な仕事なのです」

学校で作業をきちんと覚えて社会で活動することはもちろん大切だ。しかし、全員がそうなることは難しい。「障がい者の社会への出方は人それぞれ。働いて賃金をもらうことだけが方法ではないと私は思います。それぞれの能力や個性に合った「仕事」を見つけ、それを外へ向けて発信し、彼らと社会をつなげる。それがこの施設、そして私たちの役割なのだと感じています。」

互いの個性を認め合う 社会の実現をめざす

障がいのある人がその人らしく、のびのびとやりたいことをやりながら、社会とつながる生き方を模索する。そんなアルス・ノヴァの今後について、久保田さんは「タレント事務所をめざします」と明るい笑顔で答える。

「彼らの障がいを個性、タレントと捉えてそれをどう社会に示していくか。それが社会とうまく混ざり合うきっかけになればと思います」

障がい者が今の社会に合わせいくのではなく、健常者も障がい者

の個性や社会を認め、「こんな生き方や時間の流れ方もある」と受け入れることが豊かな多様性を生み出していくと久保田さんはいう。

「今の社会は常に弱い人が強くなり、強い人はさらに強くなることを望んでいるように感じられます。でも強くならなくてもいい。弱さは弱さとして受け入れることで社会はもつと

豊かになる。私はそう信じています」

弱さを弱さとして認める社会、それは障がい者が出て行きやすい社会の理想形だ。自分とは違う人々を排除するのではなく、互いを認め合い、さまざまな個性が共生する。そんな社会をめざして、久保田さんは、これからも多様な活動を行いながらメッセージを発信し続けていく。

彼らの個性を発信し社会とつなげる それが私たちの役割です。

利用者の方々とスタッフ。「全員舞台度胸がありますよ。イベントの時は大はしゃぎです」と久保田さんはそれぞれの個性をおおむ。

